

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る



敗戦から蘇えろうとする東京・神田で、仕事に使える実務的な英語を教え始めた神田外語学院。先進的かつ、実践的な教育は高い評価を得ましたが、その基礎は、佐野公一先生とともに学院を創立した佐野きく枝先生の教育や生き方に対する信念にありました。学ぶ意欲を引き出す。男女が助け合う関係を築く。人と人のつながりが平和な世界を導く。雑誌の記事などに残されたご本人の言葉に、その哲学を探っていきます。

(構成・文：山口剛/文中敬称略)

佐野きく枝は明治39（1906）年に現在の福井県鯖江市で生まれた。旧姓を黒田という。黒田家は元来、鯖江の地主であった。きく枝は、父である黒田金右衛門の教育の影響を大きく受けながら育っていった。金右衛門は江戸時代終わりの安政2（1855）年生まれである。

「父は、当時としては物の見方・考え方の新しい人でした。写真を撮ると、それに絵具で色をつけて、今のカラー写真ですね、そんな物を明治時代につくってよろこんでいました。私は兄・弟のなかの一人娘でしたが、父は、いろいろなことを話し、教えてくれました。」（※1）

写真上：佐野きく枝先生
（佐野学園所蔵）



写真下：きく枝の父、金右衛門の弟にあたる山岸甚右衛門の写真。明治34年～35年に撮影された。甚右衛門は佐野学園監事の山岸秀豪氏の祖父にあたる。文久2（1862）年生まれで、18歳で山岸家の養子となった。
（山岸秀豪氏提供、塩澤秀樹氏撮影）

当時、写真と言えは、非常に高価なものであり、かつ最新のメディアであった。金右衛門が写真館を開いたのは敦賀。中世から韓国や中国との交易を行ってきた日本海に面する港町である。きく枝が生まれるほんの数年前の明治32（1899）年には国際港として開港し、ロシアや朝鮮半島、中国などの対岸諸国と定期航路が開設された。まさに日本海側の国際交易の要所であり、国際都市だった。金右衛門は異文化を肌で感じ、進歩的な考え方を体得していったのだろう。

金右衛門は、きく枝にテニスとピンポンをやらせた。身体が弱い女性がいると家の中が暗くなりがちだからである。そして、勉強をするよう言い聞かせた。

「当時は、どこの家庭も女に学問はいらない、本を読んでもいやがられるような時代でしたでしょ。でも、父は、お勝手仕事とか掃除は、女は17才か18才になれば、だれでも自然にできるんだから、やらなくていい。それより、勉強は頭の柔軟な、若いときにやっておかないとダメだって、そういう教育をする人だった。」「それから、『人間は顔で生きるんじゃない、大切なのは魂だよ。魂をみがかなきゃいけない』ってことも、しょっちゅういってました。」（※2）（17）

1. 「対談 心の触れあう教育を」（『婦人公論』、中央公論社、昭和54年9月号）より
2. 「新女性セミナー 神田外語学院・学院長 佐野きく枝さん」（『女性セブン』、小学館、昭和60年4月25日号）より

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る



『自分の身につけた勉強は、何があっても誰にも奪われはしないよ』といつも言われました

父の金右衛門はきく枝に女性として生きていくうえで、こんなアドバイスもした。

「『人間一生のうちには、仕事に失敗したり人に裏切られたりして苦しむことが必ずある。そんなとき、男は体力があるから、それこそ何をやってでも再起できるだろう。女は男とちがって、体力で押していくわけにはいかないから、頭で勝負しろ』。父はそういう人でした。『自分の身につけた勉強は、何があっても誰にも奪われはしないよ』といつも言われました。そこで私は女の仕事として、教師の道をえらんだのです。」(※3)

鯖江裁縫女学校を卒業したきく枝は、検定試験で小学校教員免許を取得、大正14（1925）年に19歳で小学校の教員となった。

「私は、もともと子供が好きですし、先生としても、生徒ひとりひとりを可愛がったと自分でもそう思います。生徒のほうでも、私を慕ってくれました。いつの時代でも教育者の姿勢に変わりはないと思います。」(※4)

明治の末から大正にかけ、日本の教育界では、欧米の影響を受け、子供たちの自発性や個性を尊重する教育の重要性が叫ばれていた。きく枝が教師になったのは、まさにその「大正自由教育」の時代であった。きく枝自身も当時の教授法について、こう語っている。

写真上：学生と歓談する佐野きく枝先生
(佐野学園所蔵)



写真下：卒業パーティでの1コマ。
(池田弘一氏提供)

「大正14、15年ごろは、自由教育が唱えられていて、私もいろいろ考えました。『日めくり』というのがありましてね。毎日1枚ずつはがした日めくりを生徒に持って来させて教材にしました。『日めくりの数字で何か問題をこしらえてごらん』と言うんです。そうすると、数字の間に、 $+$ 、 $-$ 、 \div 、 \times などの記号をはさんで問題を考え出す子が出てくる。そこから引き算・掛け算・割り算と、さまざまな問題が、ほとんど自然に引き出されてきます。

とにかく子供たちは自分の力で問題がつかれるわけですから、たいへんな喜びようで、ニコニコしながら勉強して力がつく。その子の程度にあった問題が出てきますので、私も判断材料を得られる。文字どおり一石二鳥でした。」(※5) (2/7)

3.4.5. 「対談 心の触れあう教育を」より

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る



いいところを見つけるには、生徒ひとりひとりと
触れあい、よく知らなくちゃできません

生徒にはそれぞれ適した学び方がある。きく枝が教師時代に実践していた教育は、後に神田外語グループが先駆的に取り組み始める自立学習に通じるところが大きい。その教育哲学もまた、父、金右衛門の影響によるものだった。

「父に、あまり叱られたことはありません。父はどちらかというと、ほめて育てるというふうでしたから、私も、父にならって、生徒を叱ることはあまりしません。10のうち8つほめて、2つ叱ればいいという教育方針です。これねえ、言葉でいうのは簡単ですけど、容易じゃありませんよ。その子のいいところを見つけるには、生徒ひとりひとりと触れあい、よく知らなくちゃできませんからね。」（※6）

「その子の程度に合わせた教え方をしなければ伸びる子も伸びないので。波長が合わないのは、学生にとっては、かわいそうですもの。ちょっと自分のことで面映いんですけど、面白い教え方するのがあるな、と話題になって、あちこちと学校を移りましてね。まあ、そのたびに給料をポンポンと上げていただいたりしまして。」（※7）

冗談まじりに給料のことにも言及しているのも、生活の糧としての実務教育に専心してきたきく枝ならではの言えるだろう。教師という職業は、きれいごとではなく、能力に応じた対価の得られるプロフェッショナルの仕事なのだ。

写真上：学院の運動会に参加された
佐野きく枝先生。（水野五行氏提供）



写真下：信念に基づく佐野きく枝先生にはメディアからの取材も多かった。

（「新女性セミナー 神田外語学院・学院長 佐野きく枝さん」（『女性セブン』、小学館、昭和60年4月25日号）より）

教師としての実績を積み始めたきく枝だったが、将来の見通しは決して明るくなかった。地主として栄華を誇ってきた黒田家は土地や財産を失い、父は病に倒れた。鯖江で5年間ほど教師を務めた後、きく枝は父とともに上京する。父を看病しながら、昼は働き、夜は女学校の教師を目指して学校に通っていた。きく枝が佐野公一と出会ったのは、そんな時期だった。

佐野公一は静岡県富士宮市の農家に生まれた。家業を継がずに上京し、中央大学法学部に入学。卒業後は、紳士服の外商をしていた。ふたりは昭和6（1931）年に結婚。新婚生活のなかで、きく枝は公一の独特な価値観を知ることになる。結婚をする前、きく枝の父、金右衛門は、「あの人と結婚すると、そうとう苦労するぞ。それでもいいのか」と確かめたという。（3/7）

6. 「新女性セミナー 神田外語学院・学院長 佐野きく枝さん」より
7. 「対談 心の触れあう教育を」より

『神田外語とともに歩んできた人々の証言』

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る



これからは、外国との交流が大切になる
それは、私たち夫婦だけの問題ではない

結婚3カ月後、ふたりで明治神宮を散歩していたときのことであった。

「『頼りになるのは、あなた一人よ』と言ったら、『頼られちゃ困るよ』と言われたんです。『夫婦というのは二人そろって並んで歩くものなんだよ。お互いに助け合って生きていこうじゃないか。こちらに正すべき点があったら遠慮なく言ってくれ。夫婦ってものはそうあるべきだ。だから、頼られては困るんだ』と。はじめは薄情な人だと思ったりしまたけど……。」(※8)

その言葉通り、公一ときく枝は二人三脚で、事業を興し、学校を経営していく。佐野夫妻は、1男3女に恵まれた。昭和9（1934）年には後に、佐野学園の経営を継ぐ隆治が生まれた。末娘を出産すると、きく枝は小学校の教員に復帰し、昭和19（1944）年まで教え続けた。公一は自らの会社「佐野商店」を立ち上げ、航空部品を製造する鉄工所の経営を始めた。

そして昭和20（1945）年8月15日の終戦。浅草から深川までの焼き尽した東京大空襲から奇跡的に被害を免れた佐野商店で、きく枝は公一とともに、スキヤクワ、鍋や釜など人々が求める必需品を鉄工所で作り、売った。昭和25（1950）年には朝鮮戦争が勃発。日本はこの特需を足がかりに敗戦からの復興を遂げていく。この時期になると、公一ときく枝は貿易業を営み始めていた。ふたりは外国語教育の必要性を強く感じるようになっていった。

写真上：二人三脚で歩んだ佐野公一先生ときく枝先生。学院の式典にて。

（池田弘一氏提供）



写真下：学院の教育はアントン・グディングス氏ら外国の文化に精通した教員に任せた。
(佐藤武揚氏提供)

「昭和26、27年ごろでしょうか。主人と貿易会社をやったことがありましてね。商談や交渉をするのに、言葉がうまくないと思うように事が運ばない。だいいち、お互いの気持ちさえ通じ合わないんですね。筆談で、というわけにも参りませんからね。必要に迫られて、これは語学につよくなければ、これからはやっていけない、と痛感させられました。

私たちのほかにも言葉が通じないで困っている人が多いのではないかと考えたんです。戦争に負けて、これからは外国との交流が大切になる世の中が変わる。それは日本人全部が、ひしひしと感じたと思うんですよ。それには、私たち夫婦だけの問題ではない。みんなが勉強するには、どうしたらよいだろうか。特に次代の日本を背負う若い人たちに勉強してもらわなければいけないんじゃないか。学校をつくらうと思いついた理由は、こんなところでした。」(※9) (4/7)

8.9. 「対談 心の触れあう教育を」より

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る

「神田外語とともに歩んできた人々の証言」



外国人が単に言葉を教え・教えられるという
関係だけに終わってしまったら、ほんとうに残念です

昭和32（1957）年、佐野夫妻は念願の英語会話学校を東京・神田で始めた。自らトラックに乗って立て看板を取り付けて生徒を募集した。学生数は少しずつ増えていった。昭和38（1963）年には、長男の佐野隆治が学校経営に参画した。神田駅北口に新しい校舎ができるのを機に、きく枝は、公一と仲違いして実家を離れていた隆治を呼び戻したのである。

昭和39（1963）年には神田外語学院と改名。生きた英語を教えようと、海外に視察へ出かけた。夫婦で出かけても、飛行機は別だった。万が一、事故に遭ってもどちらかが生き残れるようにという公一の考えからだった。昭和44（1969）年に学校法人佐野学園を設立。公一の本名は和一（わいち）といったが、法人化を機に通り名を公一に改名した。公一となる決意の表れだった。学院は外国人を積極的に採用し始めた。きく枝は外国人教員に対しても、自分なりの信念を持って接した。その考え方は、神田外語グループの柱である異文化コミュニケーションそのものであった。

「私ね、その外人の先生方に言うんです。『日本に来られたら日本のこともよく勉強してくださいね。言葉そのものは各人の母国語ですから、もちろん教えられますけれど、それだけでは、ちょっと困るんです。言葉というものには、その言葉が成り立ってきた背景・歴史があり、長いあいだに培われた、その国独特の発想があるでしょう。お国の事情がそうであるように、日本にも同じように歴史なり伝統があります。日本人特有の発想というものにも目を向けていただきたい』と言うんです。

写真上：学院では恒例となった外国人教員による書き初め。

（池田弘一氏提供）



写真下：金色夜叉を熱演した外国人
教員たち。（神田外語学院校友会
『平和の礎』より）

日本人と外国人が互いに、単に言葉を教え・教えられるという関係だけに終わってしまったら、ほんとうに残念ですし、私どもが学校をつくった根本の心とも合わなくなってしまうですね。ですから、この学校で教えている外人の先生たちは、あちらですでに日本のことを勉強してきた方もいますけど、そうでない方々には、学院のなかで集まって、日本の文化や歴史を勉強していただいております。」（※10）

きく枝は、日本文化に精通した講師の池田弘一の協力を得て、正月になると外国人の教員に書き初めをさせた。男性は羽織袴、女性は振り袖を着た。作品は神田駅に掲出され、新聞にも取り上げられた。外国人教員たちは、尾崎紅葉の小説『金色夜叉』を芝居で上演したり、千葉の農家に田植えに行ったりと日本文化を理解するためのさまざまな体験の機会を得たのである。（57）

10. 「対談 心の触れあう教育を」より

TOP

インタビュー

GALLERY

HISTORY

FUTURE

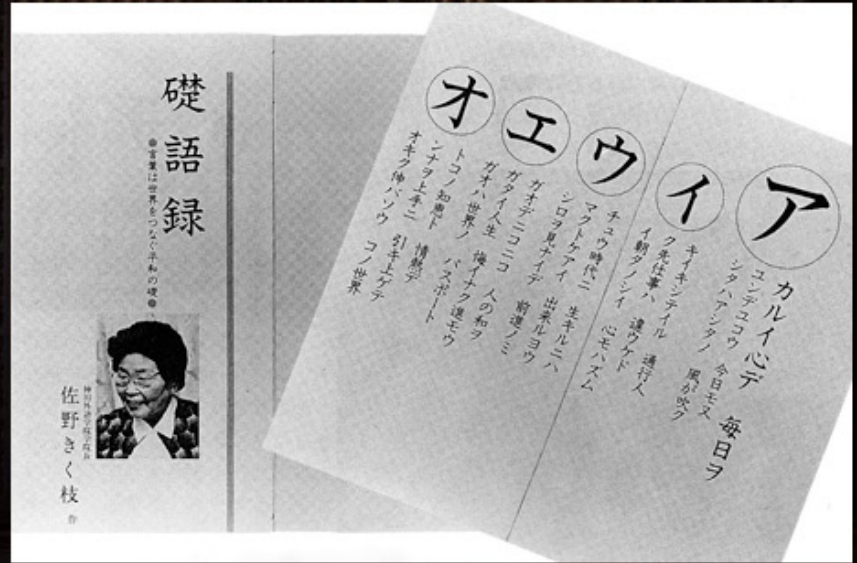
CONTACT

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る

全ページを印刷する(PDF)

このページを印刷する



男は天・女は地。両性が相補って、家庭ができ、
社会・国家が成り立つ。私は、そう思いますね

高度成長期の波に乗る日本では、女性の社会進出が急速に進んでいった。その変化に呼応するように、神田外語学院には実務的な英語を学ぼうとする女子学生が押し寄せた。最盛期で昼間と夜間を合わせて学生数は6500人に上った。

昭和53（1978）年に佐野公一が逝去すると、きく枝は学院の実務を佐野隆治に、英語教育は副学院長のアントン・グディングスに任せながら、自らはマナー教育に力を入れていった。女性らしさ、男性らしさを重んじるきく枝の教育は、夫の公一との二人三脚で英語学校を実現した経験に裏づけされたものであった。

「男が『はい、そうですか』って押されればなしで黙っていることはない。それは決して男に威張れというわけではありません。世の中は男と女で成り立っているのですから、男と女が、互いに理解し合って協力してゆくのは当然ですね。

ですけど、やっぱり男がしっかりしていないと、うまく納まらない面がある。男が腰を据えている、というのが大事だと思います。男は天で、女は地ですよ、と学生たちに言うんです。たとえば、子供の教育にしても、母親に任せきりなんていう父親が多いようですが、とんでもない話です。肝腎なところに、父親の目がキラリと行き届く、そういう教育、そういう男が本物なのだ。

写真上：佐野きく枝先生が卒業生たちに贈った「基礎語録」。50音順に人生訓が綴られている。（神田外語学院校友会『平和の礎』より）



写真下：昭和62年、新設された神田外語
大学1号館に完成した佐野弘一先生胸像
の除幕式にて。（池田弘一氏提供）

女の子には、『男は天・女は地、というわけだから男に従うのが筋でしょ』と言います。しかし、従うといっても、何でもハイ、ハイと言うことではない。女が男の言いなりになっていたら家庭も社会も成り立ちません。男の至らない点は女が補い、助けてゆく。私が『従う』という意味は、そのへんの機微というか、呼吸をのみこんだうえで、男に一步譲る心なんですよ、と。男を立てる気持ちですね。これが万事を円滑にするコツでしょう。つまり、男は女を見る眼、女は男を見る眼を、それぞれしっかりと持たなければならない。

男女それぞれに特長があって、両性が相補って、家庭ができ、社会・国家が成り立つ。私は、そう思いますね。」（※11）

神田外語学院もまた、佐野きく枝という「地」の存在によって、佐野公一や佐野隆治、そして数多くの男性教職員たちが自らの潜在能力を十二分に発揮できたからこそ、かつてない英語教育に挑戦し、実現できたと言えるだろう。（6/7）

11. 「対談 心の触れあう教育を」より

神田外語とともに歩んできた人々の証言

第20回 佐野きく枝 神田外語学院第2代学院長
心の交流が争いのない世界を創る



たくさんの国に友人ができれば、あの国と争うのはよそう、という若者が増えてくるだろう

佐野きく枝は、生涯を通じて、教師として学生を愛し、社会に送り続けた。彼女は、その実践のなかで、異文化理解教育の本質を見極めていった。昭和54（1979）年、雑誌『婦人公論』である提言をしている。公一が逝去した翌年であり、大学設立に向けて本腰を入れ始めた年に掲載された記事である。

「日本は経済大国とか、世界最大の黒字国だとか言われますね。国内では、高校の卒業生は毎年、140万、150万人にも昇っています。私は、その卒業生の何分の一でも良いから、国の費用で1年ぐらい外国で働いてくる制度ができないかなあ、と考えているのです。1人1人に200万円ほど出してやる。その代り、行った先の国では一銭も稼いではいけない。完全な奉仕のかたちで、外国で働いてくる。それは、すなわち日本の黒字減らしに役立つし、本人は見聞をひろめて帰ってくる。なによりも大切なのは、行った国の人たちとふかいコミュニケーションが得られることでしよう。

写真上：佐野きく枝先生（神田外語学院
校友会『平和の礎』より）



写真下：神田外語大学の本館にて。
大学開学を見届けた佐野きく枝先生は
初年度が終わるのを待たずに逝去された。
(池田弘一氏提供)

素朴な言い方ですけど、たくさんの国に友人ができれば、あの国と争うのはよそう、まして、彼らと殺し合いなどできやしない、という若者が増えてくるだろう。そしてその人たちが壮年に達して、国内的・対外的に活躍できる立場になったとき、結果は、おのずとあきらかになるのだろうと思うのです。いろいろ体験をすれば、ほんとうの自分が見えてくる。それから自分の進路を定めれば、しっかり勉強できるんじゃないでしょうか。」(※12)

きく枝の提言は、神田外語グループの「言葉は世界をつなぐ平和の礎」という理念の具体策を表している。国が主導して、日本と異国の若者どうしの心の交流を図り、平和を実現する。それは、グローバル社会に飲み込まれている日本が、今まさに実践しなければならない、「きく枝先生からの宿題」なのである。(77)

佐野きく枝(さのきくえ)

明治39(1906)年1月、福井県鯖江市に生まれる。鯖江裁縫女学校を卒業後、大正14(1925)年に小学校の教師に。上京後、昭和6(1931)年に佐野公一と結婚。昭和32(1957)年、後に神田外語学院となる英会話学校を設立し、以来副学院長として学校経営と学生の教育に情熱を注ぐ。昭和53(1978)年、公一の逝去に伴い、佐野学園理事長、神田外語学院第2代学院長に就任。神田外語大学が開学した翌年、昭和63(1988)年1月11日、永眠。享年82歳。

12. 「対談 心の触れあう教育を」より